

中世の経蔵における聖教・文書の収納状況

藤 井 恵 介

序 言

正倉院構内に所在する聖語蔵の建築としての特徴は、すでに本誌所収の「正倉院聖語蔵（旧尊勝院経蔵）調査報告」（著者：清水真一、藤井恵介、春日井道彦、中西將）において論じられている。

東大寺内には奈良時代の創建時以来、多数の蔵が建設されており、しかもいくつも現存している^(註1)。このことは東大寺が古代以来日本で最も有力な寺院の一つであったことを雄弁に物語ると言ってよいだろう。現在の正倉院聖語蔵はもともと東大寺の院家尊勝院内にあったもので、東大寺の諸蔵の一つに数えられる。

この経蔵について特筆されるのは、経蔵内部の壁の全面に沿って経棚が設置されており、それが創建時（鎌倉時代中期と推定される）まで遡るものではないか、と考えられることである。

しかしながら、古代以来日本国内で多数建設されてきた経蔵において、内部に聖教・文書などがどのように収納されてきたのか、いままであまり語られてきたことがない。

経棚類は、建築本体に組み込まれて造られることは稀であって、本体の建設後に細い部材で組み上げることが多かったようである。そしてそれはあまり頑丈ではなく、後に解体撤去されることが多かったようだ。古代・中世以来の実際の遺構をみる限り、経棚が現存している例がほぼ皆無なのである。また、聖教や文書を納めた櫃や箱についても十分に気配りされてきたとは言えない^(註2)。本質的に紙という素材は、木製の櫃や箱によって保護されている限り、容器よりはるかに長寿命である。それゆえ、聖教・文書を納めた櫃や箱は何度か廃棄され、新しいものに取り換えられ、それらは現在まで維持されてきたのである。木造の経蔵という施設と、紙製の聖教・文書の間を繋ぐものは、棚であり櫃や箱だったのであるが、それらがほとんど失われてしまったので、現在では「生きている経蔵」「使われている経蔵」というイメージを獲得することがなかなか困難になっていると言わざるを得ない。

本稿においては、正倉院内の聖語蔵に関連して、日本の古代・中世の経蔵・文庫のいくつかを取り上げて、経棚の設置状況と、聖教や文書を収納した櫃や箱を納め置いた実態を探ってみることにしたい。

1. 正倉院聖語蔵

正倉院聖語蔵は、正倉の南側やや東よりに位置し北面する。木造の校倉造の建物であり、高床、瓦葺である。内部は一室であって、壁は校木の内側の面で作られている。束柱は正面三間、

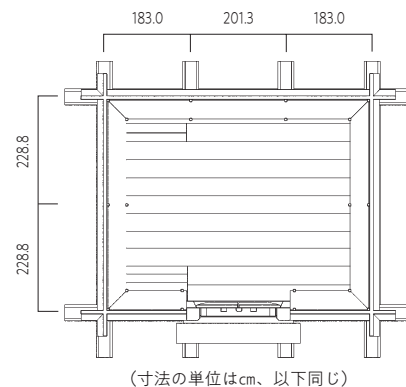
奥行二間に配置する。1尺を0.305mとすると、正面中央間が6.6尺、両脇間が6.0尺、梁間の一間がそれぞれ7.5尺となるので、これが建設当時の計画寸法と推定される。

聖語蔵では、入口の扉を除いて、内側の壁面に沿わせてすべての面に棚が設けられている。壁際と内側の2列に支柱を立てて、その間に棚板を置く。棚板は7段であり、上に天板を置く。棚板は厚さ3cm弱、幅は36cmほどである。棚の1段の高さは34.5～35.5cmである。床面から最下段の棚板までは69.5cmと大きい。支柱・棚板ともに上質のヒノキを用いており、当初からの状態が維持されてきたように見受けられる。国内に現存する古代・中世の経蔵では、経を納めた経棚はほぼすべてが失われているので、改めて貴重なものとして認識する必要がある。

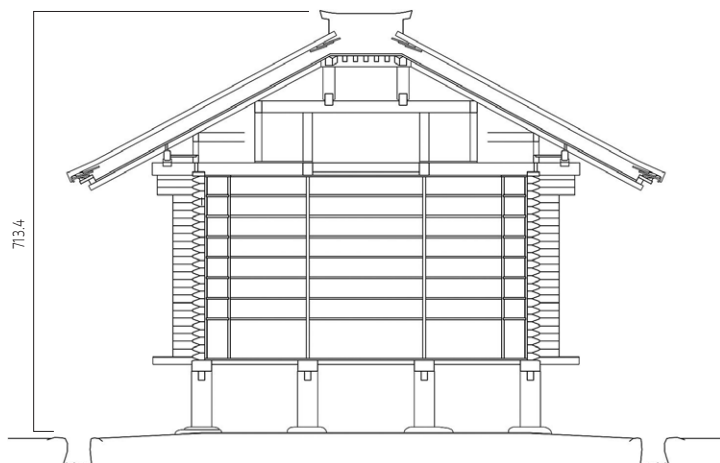
なお、今回実施された年輪年代調査では、辺材部を確認できた棚板2枚から、最外層の年代が1101年、1126年との結果が得られている^(註3)。本経蔵が鎌倉時代中期の建設であるとする、経棚には寺内で保持されていた古材を使ったということになるだろう。



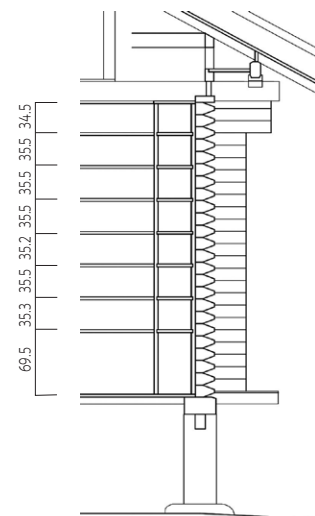
挿図1 聖語蔵全景



挿図2 聖語蔵平面図



挿図3 聖語蔵断面図



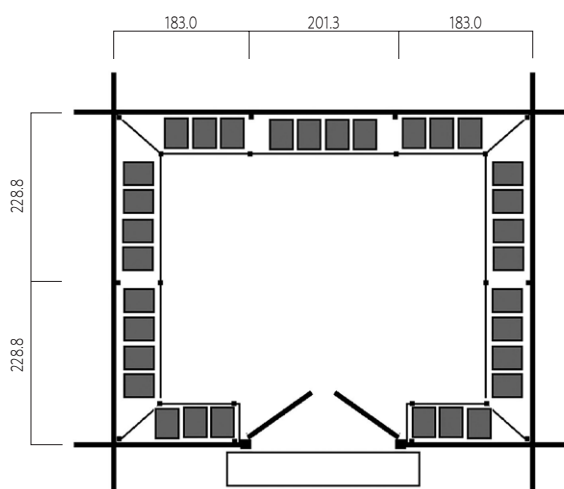
挿図4 聖語蔵経棚断面詳細図



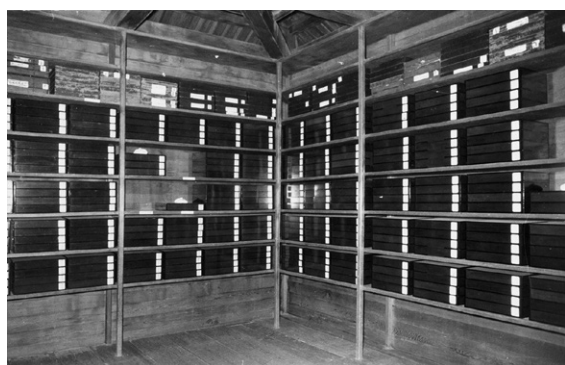
挿図5 聖語蔵内部経棚



挿図6 聖語蔵旧経箱（東大寺八幡宮大般若経納置）



挿図7 聖語蔵経箱の収納想定図



挿図8 聖語蔵内部の旧状態（昭和35年頃か）



挿図9 聖語蔵床の傷

ここで聖教と文書を入れた櫃と経箱の大きさについて検討したい。経巻を納める櫃については現存しないが、正倉院に所蔵される宝物を納めた古櫃（166個）についてまとめた調査報告がある^(註4)。それによると櫃の高さはほぼすべてが40cmを超え、最大で61.2cmである。この寸法を参考に考えると、聖語蔵の経棚は櫃の収納を想定していないと言えよう。

次に経箱であるが、正倉院事務所によれば、正倉院には明治時代の整理以前の旧経箱が複数種、計120点ほど現存しており、そのうち最も多く残っている種類は、15世紀中ごろの東大寺八幡宮の大般若経用のものと考えられるという（挿図6）^(註5)。その大きさは以下のようなものである。

縦32.2cm、横40.3cm、高さ4.9cm

仮にこの種の経箱で考えると、まず、経棚上に経箱を置こうとすると、挿図7のように、1段に最大で32合ほど並べることができる。次に経棚は1段の高さが34.5cm以上であるから、最大で6つの経箱を重ねることができる。また、入口の扉の上方には2段棚板が設置されているので、さらに8合ほど経箱を置くことができる。

そこで、各段の棚に6重に収納すると仮定して、収納可能な経箱の総数を計算すると、以下のようなになる。

1段の収容量	32合×6重	=192合
7段の収容量	192合×7段	=1344合
全体の収容量	1344合+(8合×6重)	=1392合

仮に一つの経箱に10巻を入れるとすると、13,920巻を収納することができる。明治27年（1894）に東大寺から献納された聖語蔵経巻は、明治43年の整理時点で4,768巻、126帖、6括であり、その後昭和5年（1930）の目録刊行時には4,960巻を数えた^(註6)。それゆえ、この時点では経棚の4割弱ほどが使用されていたと判断できよう。経棚に経箱を納めた状態の写真（挿図8）^(註7)があるのだが、経箱の納置状況は上記の推測と矛盾しない。

なお、この写真では経棚の最下には櫃、箱が入っていないのだが、床面に脚を引きずったような痕跡がほぼすべての棚下にあるから（挿図9）、脚をもつ櫃が置かれていたのは確かだろう。正倉院正倉に伝来した古櫃は、高さが概ね40～60cmである^(註8)。これを参考にするに聖語蔵の最下段の棚板の高さは櫃の収納を意図したものと考えてよいだろう。

2. 春日大社一切経蔵

春日大社にはかつて康和2年（1100）に白河院が寄進した一切経を納めた経蔵があった。その内部を描いた指図「春日社一切経蔵内指図」（挿図10）が残っていて、聖教・文書などを収納した櫃・箱の収納状況が判明する^(註9)。南側に入口があり、内部は北、東、西の壁に沿って棚が設置されていて、それぞれに収蔵されている聖教・文書の名称が記されている。

『春日社経蔵経論注文』^(註10)所収の目録によって、文永元年（1264）の段階で当経蔵内に納置されていた聖教・文書などが明らかになる。朱櫃85合が白河院寄進の一切経を納めた櫃であって、北、東、西の三方の棚に納置されていた。指図には「下二重毎日不退一切経 八十五合内」

春日大社一切経蔵は現存しないものの、収納されていた聖教・文書の名称が判ると同時に指図まで残されていて、中世の経蔵の内部を彷彿させる稀有な例と言えよう。

3. 醍醐寺経蔵（焼失）^(註12)

醍醐寺所蔵の宋版一切経は、俊乗房重源が建久6年（1195）に醍醐寺に施入して、上醍醐の経蔵内に納められてきたものである。一切経は604合の経箱に納められている。全体は6,096帖であるが、大般若経655帖だけが開元寺版であり、他はすべて東禅寺版である。

上醍醐の経蔵（挿図11）^(註13)は、昭和14年（1939）8月29日に、山火事が延焼して焼失した。この時、蔵内に収納されていた宋版一切経は、幸いにも調査のために前年に山下におろされていて、難を逃れた。

経蔵の建設年代には二説ある。一つは、宋版一切経が施入された直後に建設されたとするものの、もう一つはそれが文応元年（1260）に焼失したあとに再建されたとするものである^(註14)。後者の理由は、本格的な大仏様の要素が見られないことである。本稿では、これについては論じない。いずれにしても鎌倉時代前半のものと判断できよう。

この経蔵には宋版一切経が納置されていたのだが、内部に正面三間、奥行二間の屋根付きの経室があった。その覆屋として外側に建築が設けられていて、これを経蔵建築とするのである。経棚は、経室内部の中央に奥行き大きなものが横並びに2つ、入り口左右に奥行きの小さなものが2つ設けられていた。経箱はこの棚に納置されていたはずである。

経箱は中国で制作された同一規格のものである（挿図15）。以下に寸法を記す^(註15)。

縦35.2cm、横17.3cm、高さ20.8cm

経室内部の経棚の棚板は天板を含んで11枚あるので、棚は10段になる。床から棚の天板まで310cmほどだから1段の高さは28cmほどになる（ $310 \div 11 = 28.2$ ）。それゆえ、棚に経箱を横に並べ置いたのである（そもそも経箱は蓋付きで、重ねることを想定していない）。

収納可能な箱数を計算してみる。

1段の収容量 中央の棚 $11合 \times 2列 \times 2棚 = 44合$

左右の棚 $10合 \times 2棚 = 20合$

全体の収容量 $(44合 + 20合) \times 10段 = 640合$

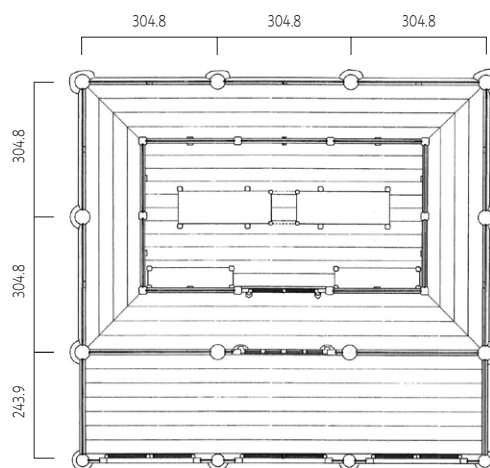
640合が収納可能最大数となる。実際には606合（現存は604合）が納められていたので^(註16)、少しの余裕をもって棚が計画されたようである。

この経蔵は広く、経室内部にさらに棚を置くこともできる。また内部に経室を設けるのは、宋版一切経が特別に高い価値を持っている、と判断されていたことを示す可能性がある。

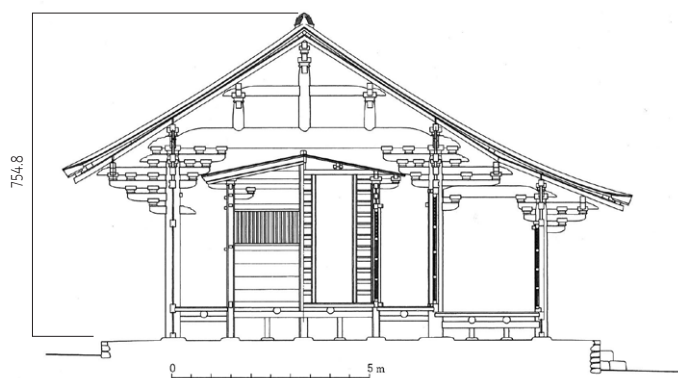
経室の現存例は他にはないようだが、金沢文庫に寄託の称名寺史料の中に経庫図が1点含まれている^(註17)。



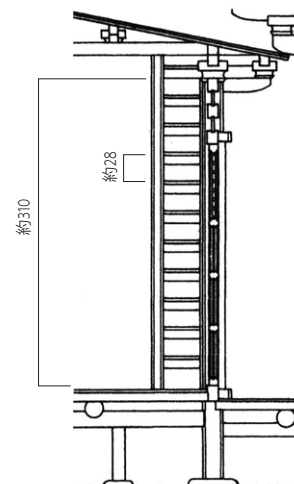
挿図11 醍醐寺経蔵全景



挿図12 醍醐寺経蔵平面図



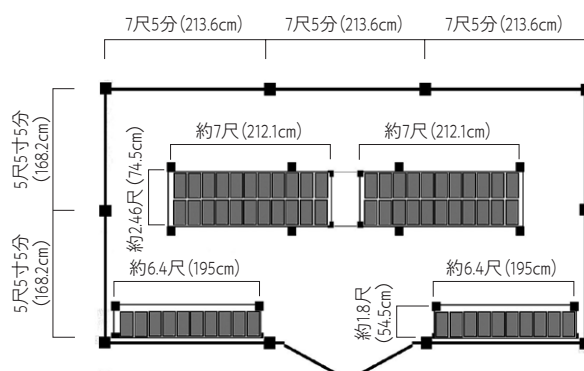
挿図13 醍醐寺経蔵断面図



挿図14 醍醐寺経蔵経棚断面詳細図



挿図15 経箱（醍醐寺蔵宋版一切経）



挿図16 醍醐寺経箱の収納想定図（経室内部）

4. 般若寺経蔵^(註18)

般若寺経蔵の前身建築は、鎌倉時代中期の建設にかかり、正面、側面の大部分が開放の簡素な建物であった。鎌倉時代末から室町時代初期のころに、現在のような床を張った経蔵に改造された。

ここに収蔵されていたのは元版一切経で、至元16～24年（弘安2～10年、1279～1287）に版行された杭州普寧寺版である。もともと6,000巻あったと推定されるが、かなり散逸して現在は760巻が現存している。

断言はできないのだが、元版一切経が般若寺に入ったことを契機として、前身建築が経蔵に改造されたのではないかと推定されている。

一切経は、折本装で数冊から10冊ほどを表裏に板を当てて束ねて箱に納めている。

本経蔵は、昭和44年（1969）に重要文化財に指定されたのち、昭和47年から解体修理を受けた。経典を収蔵する棚が、後の改造・修理で撤去されていたのだが、柱の切り込み、床の柱当たり痕跡から、復元されている。

経蔵は西面するが、経蔵内東南北の三面は床上から飛貫まで5段の棚が設けられ、正面の西側は中央に扉口が空き、両脇の連子窓の下に3段の棚が付くことが明らかになったのである。また、西側の面の経棚、南北面の経棚の西側三分一ほどは上方の2段がなく3段である。

寺蔵の鎌倉時代以来の経箱（挿図21）の大きさは以下のとおりである。

縦38.5cm、横35.5cm、高さ9.25cm

それを経棚に収納しようとする、挿図23のように収納することが可能である。棚内部の高さは最下段から最上段まで以下の通りである。

50.5、35.1、35.1、35.1、38.1（単位：cm）

横棧の高さが6cmであって、これを減ずると実際に使える高さとなる。それぞれ以下の通り。

44.5、29.1、29.1、29.1、32.1（単位：cm）

そうすると、棚に積める経箱の最大数は以下の通りとなる。

4重、3重、3重、3重、3重

各段に3重に収納すると仮定して、収納可能な経箱の総数を計算すると以下のようになる。

1段の収容量（下方3段） $42合 \times 3重 = 126合$

下方3段の収容量 $126合 \times 3段 = 378合$

1段の収容量（上方2段） $28合 \times 3重 = 84合$

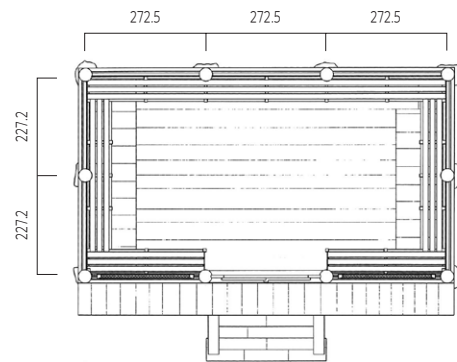
上側2段の収容量 $84合 \times 2段 = 168合$

全体の収容量 $378合 + 168合 = 546合$

最下段の棚は高さが44.5cmほどだから、経箱を4重に積むことができる。そうすると、さらに42合を収納できる。また、天板が棚板と同じ仕様であり、上方に棚1段分の高さがあるから、84合を置くことも可能である。それゆえ、収納できる総数は、 $546 + 42 + 84 = 672合$ 、となる。これが収納できる経箱の最大数となる。



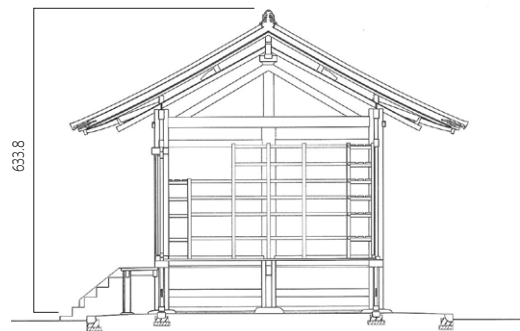
挿図17 般若寺経蔵全景



挿図18 般若寺経蔵平面図



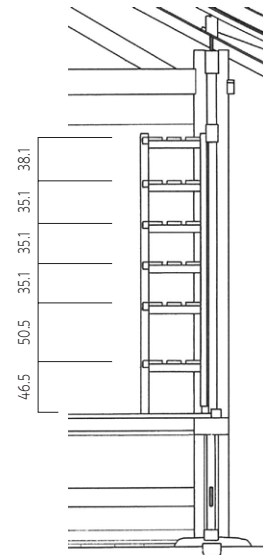
挿図19 般若寺経蔵内部の経棚（復元）



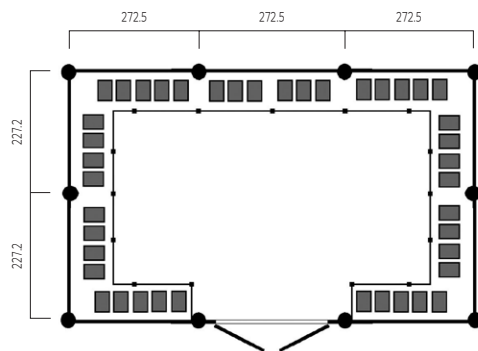
挿図20 般若寺経蔵断面図



挿図21 経箱（般若寺）



挿図22 般若寺経蔵経棚断面詳細図



挿図23 般若寺経箱の収納想定図

5. 藤原頼長の文倉

経蔵ではないが、12世紀の類似の施設として藤原頼長の文倉が著名である^(註19)。書物の蒐集家であった藤原頼長は、天養2年(1145)に自邸大炊高倉亭の乾(北西)隅に火難を避けるために新たな文倉を設けた。自身の日記『台記』によれば、同年正月19日に着工し、4月2日に完成した。『台記』4月2日条には以下のように記される(ウは『宇槐記抄』による校異^(註20))。

自正月所始造之文倉造了、今日置文書、依吉時用午刻〈憲榮勘申日時〉、余着冠直衣、取春秋緯櫃、先入置陽棚〈東棚五重、謂之陽〉、藏人式部丞藤成佐着束帶、取易詩等緯及河渠書櫃、復(後ウ)入置陰棚〈西棚六重、謂之陰〉。

文倉内部、東棚は5重であって、「陽」の棚とした。春秋の緯書などを納めた櫃を入れた。また、西棚は6重であって、「陰」の棚とした。易詩の緯書などを納めた櫃を入れた。

また、文倉の形状については、以下のような具体的な記述がある。

文倉制、高一丈一尺〈此外礎高一尺〉、東西二丈三尺(間ウ)、南北一丈二尺〈一間〉、南北有戸、四方皆拵之以板、其上塗石灰、其戸塗蠣柄、為不令剥落也、葺以瓦、

これに従えば、文倉のおおよその形状が推定できる。高さは礎石の上から屋根の上まで、1丈1尺(約30.3cm)、足元は1尺高さの礎を置く。東西は、三間であり、全長2丈(約606cm)である(『宇槐記抄』の記述を採用する)。南北は1丈2尺(約363.6cm)、一間である。扉は南北に開ける。

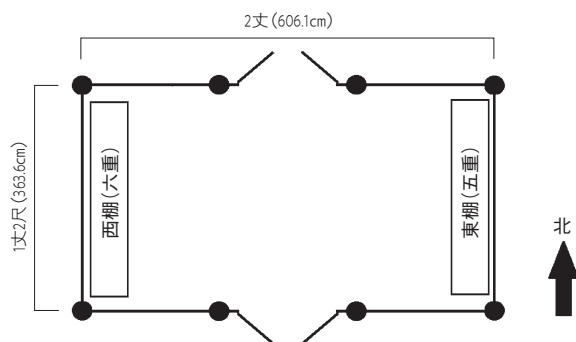
外壁は板であって石灰を塗り、また扉にも蠣柄(殻)を塗った。屋根は瓦葺であった。当時の建築防火対策の実態を知ることのできる稀な例である。

上記の数値を根拠とすると平面は挿図24のように推定することができよう。屋根の形状は切妻造として棟を東西につくるのが常識的な判断と思われる。屋根の傾斜を五寸勾配とすると^(註21)、断面は挿図25のように推定できよう。東棚、西棚を東西各壁の一面だけに沿わせて設置したことを想定しているが、南北の壁にも沿わせて棚を作ることは可能である。

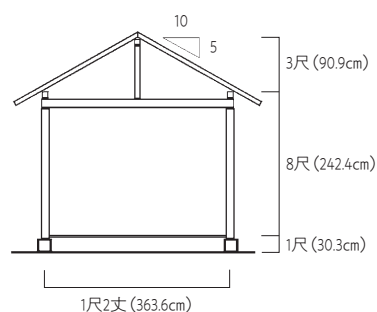
各棚がそれぞれ内法高さ(桁の高さ)まで棚が作られていたとして、棚の1段の高さについて、以下の推定をしてみた。

東棚 8尺(約240cm) ÷ 5 = 約48cm

西棚 8尺 ÷ 6 = 約40cm



挿図24 藤原頼長文倉推定復元平面図



挿図25 藤原頼長文倉推定復元断面図

正倉院の調査によると、古櫃の高さは50cm前後のものが多く^(註22)、この高さでは棚に入れることはできない。頼長の使っていた櫃が、もう少し扁平なものであったか、もしくは下段の棚間隔を大きくして、上方の棚間隔を小さくした、というような可能性も求められる。

結 語

以上で、中世、特に12～13世紀における経蔵の内部の様子、特に聖教・文書の収納状態を中心に事例を検討してきた。

春日大社一切経蔵の事例は、白河法皇による一切経の寄進のために、新たに建設された経蔵だが、のちに徐々にさらなる施入品を加えて、結果的に出来上がってきた経蔵内部の姿を示しているだろう。

また、醍醐寺経蔵の場合は、すべての棚の高さが統一されているので、中国から将来された宋版一切経という大規模な聖教のみを納めるために、新たに開発された方式を示しているのだろう。このような方法は、禅宗の将来とともに日本国内で普及した輪蔵という形式（経棚を堂の中心に置いて回転させる）の先行形態とみなすことも可能である。輪蔵は、中世において禅宗寺院から普及していったようで、近世には広く普及した経蔵の形式となった。これらは、聖教を折本という形態で納めたのである^(註23)。

般若寺経蔵の場合、壁面に経棚を沿わせるという形式は、春日大社一切経蔵、正倉院聖語蔵と共通するのだが、収納されたのは元版の一切経であって、当初から大規模な一群の聖教を収納する予定で経棚が設計されたはずである。春日大社や聖語蔵の方式を、将来された經典の経箱の大きさに合わせて、工夫したと考えることができるだろう。

最後に、正倉院聖語蔵について触れることにする。聖語蔵の内部の経棚が扉以外の壁に沿って置かれるのは、春日大社一切経蔵と同じ方式をとったと言えよう。しかし、春日大社では一切経が「朱櫃八十五合」に納められていたのだから、経棚の各段の棚の高さはそれに合わせて、比較的大きいものであったと推定される。聖語蔵において、棚の間隔がほぼ同じであるのは、高さが比較的低い経箱に納められた聖教を収納することが予定されていたからではないか、と推定される。もっとも最下段は高さが大きいので、ここには櫃が置かれたであろう。櫃に経巻を納める方法は奈良時代からあったので、それが部分的に維持されたのである。正倉院聖語蔵と般若寺経蔵の経棚はほぼ類似の構成をとっているので、これを中世奈良に普通にあった例とみなしてよいように思われる。

今回の報告の内容は、創建時から近代まで、変化しながら連綿と維持されてきたものの、近代に入ってから決定的に失われてしまった経蔵内部の姿を推定する試みである。それを復元的に想像することの可能性を覗くことができたとしたら幸いである。

(ふじい けいすけ 東京大学名誉教授)

註

- (1) 歴史的に東大寺内にあって現存している経蔵は以下の通りである。東大寺本坊経庫（奈良時代、国宝）、勧進所経庫（平安時代前期、以下重要文化財）、法華堂経庫（平安時代前期）。いずれも校倉造、高床、瓦葺である。また、同じ形式の建物に、正倉院正倉（奈良時代、国宝）、手向山神社宝庫（奈良時代、重要文化財）がある。建築的な解説は、『奈良六大寺大観』第九巻 東大寺一（岩波書店、1970年）を参照されたい。

このほか、広く経蔵を扱う論考に以下のものがある。

清水真一『校倉』（『日本の美術』419、至文堂、2001年）

堀 祥岳「『経蔵』再考—類型と機能—」（『臨済宗妙心寺派教学研究紀要』第9号、2011年）

- (2) 正倉院正倉に伝来した櫃については以下の研究があり、その形態・法量などについての情報を得ることができる。正倉院に所蔵される「古櫃」は多くが奈良時代のものと推定されている。平安時代、鎌倉時代の櫃については有力な情報がないので、とりあえず櫃の概要を知るためにこの情報を頼りにすることにした。

関根真隆「正倉院古櫃考」（宮内庁正倉院事務所編『正倉院の木工』日本経済新聞社、1978年、関根『正倉院への道—天平美術への招待』〔吉川弘文館、1991年〕収録）

飯田剛彦・佐々田悠「正倉院櫃類銘文集成（一）—古櫃—」（『正倉院紀要』第41号、2019年）

- (3) 星野安治「正倉院聖語蔵（旧尊勝院経蔵）の年輪年代」（本誌所収）。
- (4) 註（2）論文参照。
- (5) ほかに、底裏に「文安元年（甲子）五月十六日」「新造屋常住也」との墨書のある旧経箱もある。聖語蔵経巻の乙種版経第11号大般若経（施主大法師見賢）がこれらと関係する可能性があるとのこと。
- (6) 『正倉院聖語蔵経巻目録』（奈良帝室博物館正倉院掛、1930年）。
- (7) 正倉院事務所所蔵。
- (8) 註（2）論文参照。
- (9) 末柄豊「興福寺蔵『大乘院御門跡文庫古文書写』」（安田次郎編『興福寺旧蔵文書による古文書と古記録との関連についての史科学的研究』科学研究費研究成果報告書、2008年）で紹介、解説されている。書起図は末柄豊氏の提供を受けた。感謝申上げる。
- 藤原重雄「絵画史料に描かれた蔵」（小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世人のたからもの一蔵があらわす権力と富一』（考古学と中世史研究8）高志書院、2011年）参照。
- (10) 加藤優「興福寺所蔵『春日社経蔵経論注文』」（『奈良国立文化財研究所年報1987』、1988年）による。文永元年の目録を享徳三年（1454）に書写している。なお、以下の史料の引用文の〈〉は、細注を示す。合点等は省略した。

「春日御経蔵被納経論等目録」

朱櫃八拾五合〈之内五合真言経、余一切経律論等〉三方棚安置之、

○東棚

細櫃六合〈金泥唯識論六部 仁王経、不空罽索経 心経〉 入之

細長箱二合 唯識論 金剛般若経 春日御本地 入之

朱櫃五合〈被指鑲、但無鑑〉朱櫃二合〈瑜伽論〉

塗箱十二合 大般若経 被付封

○北棚

塗箱一合〈唯識論一部、水精軸〉

細箱一合〈金剛般若經 被付封〉

櫃 一合〈院三十講廻請 被付封〉

相箱一合〈起請文等〉 入之

櫃 五合〈内蓮花会手箱二合 雜物等〉 入之

○西棚

白櫃十合〈大般若經〉 □□三合 入之

櫃 一合〈最勝王經 唯識論〉 入之

平相箱一合〈中在塗箱 金泥唯識論〉 入之

朱櫃十三合〈不転読真言經〉 此外一合 入之

○此外

櫃 一合〈御庄重書〉 被入之 但室殿御所被召之〈云々〉

平箱一合〈六帖自書〉 入之 但為書本 助僧都被借之

塗厨子一脚〈被指鑲但無鑑〉

朱唐櫃一合〈被指鑲但無鑑〉

塗番帳一枚〈古經衆交名等書之〉

前机一前

自古今着到等

已上賢位惣藏司之時見及承及分謹注進之

文永元年十月 日

于時享德三年〈甲戌〉三月十六日以古本書寫之

檢校少僧都尋尊（花押）

- (11) 『大乘院寺社雜事記』文正元年（1466）12月4日条に記載された注文。

注文

一切經朱櫃八十五合〈五合真言經也〉三方棚安置之

東方棚分者

黃紙瑜伽論〈朱〉二合〈後鳥羽院宸筆、御願文三通并諷誦文〉

法花經一部入箱

五部大乘經入箱〈小本〉

六帖自書入箱〈音義也〉

雜々經入箱

仏一休觀音歟木像〈八寸許〉

〈院〉三十講廻請・河口証文・置文等一合

古今著到數百帖

北方棚分者

金泥大般若一部入黒塗箱十二合〈光明峯寺殿〈殿下〉御願也〉

金泥唯識論一部〈御經箱、論尺〉勅願〈後深草宸筆〉新三十講用入櫃

金泥唯識論一部〈御經箱〉三代勅筆入櫃

西方棚分者

真言經等入朱櫃十三合

金泥五部大乘經入朱櫃五合〈後京極摂政御願云々〉

一切經音義三合

中央厨子分者

金泥大般若一部〈帙箱六十合黒塗、御願文等在之〉峯殿関白〈光明峯寺殿下〉御願也

金泥唯識論一部〈同御願歟、但鷹司称円光院殿下、文永八年十一月九日御持参論歟〉

以上

朱甲朱櫃一合之内者

黄紙金剛經入文箱

(以下略す)

- (12) 建築の解説・平面図・断面図は以下による。

藤井恵介「経蔵（焼失）」(『醍醐寺大観』第一巻、岩波書店、2002年)。

醍醐寺経蔵は焼失建築であるので、過去に制作された実測図が検討するときの根拠となる。本稿で頼りにしたのは「文化庁保存図」と称される図面群のなかの、醍醐寺経蔵の図面である。醍醐寺経蔵図は、寸法を尺・寸・分で記入しているので、適宜メートル法に換算した。また経蔵内部の経棚には寸法の書き込みがないので、柱間寸法などから推測値を求めた。

- (13) 全景写真は以下の書籍からの転載である。岡田戒玉編『醍醐寺霊宝纂』（総本山醍醐寺、1928年）。

- (14) 田中淡「重源の造営活動」（『仏教芸術』105号、1976年）。

- (15) 小林芳規「醍醐寺蔵宋版一切経解題（一）」(『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第一冊、汲古書院、2015年）。

- (16) 同上。

- (17) 「125号 経庫図」（『金沢文庫資料全書』第九巻寺院指図篇、神奈川県立金沢文庫、1988年、復刻版、臨川書店、2018年）。

- (18) 般若寺経蔵及び納置されていた一切経、経箱などに関する情報は以下の報告書による。

奈良県文化財保存事務所編『重要文化財般若寺経蔵修理工事報告書』（奈良県教育委員会、1973年）。

- (19) 橋本義彦『藤原頼長』（吉川弘文館、1964年）。

- (20) 藤原重雄「絵画史料に描かれた蔵」註（9）論文。

- (21) 簡単な建物であって参照すべき実例はない。当時の瓦葺（本瓦葺）の建物で小規模のものでは、平等院鳳凰堂翼廊の屋根が六寸勾配ほどであり、時代は下がるが桃山時代の春日大社本社南東廻廊の屋根が五寸勾配ほどである。以下の報告書を参照した。

京都府教育庁文化財保護課国宝平等院鳳凰堂修理事務所編『国宝平等院鳳凰堂修理工事報告書』1957年。

奈良県教育委員会編『国宝春日大社本社本殿ほか十五棟修理工事報告書』奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所、2006年。

- (22) 註（2）論文参照。

- (23) 大塚紀弘「中世の寺社と輪蔵—中国文化としての受容と拡大」（『中世政治社会論叢』村井章介先生退職記念 東京大学日本史学研究室紀要別冊、2013年、大塚『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）収録）。